

## 国家戦略特区

# 介護ロボット等を活用した「先進的介護」の実証事業の開始について

### 【概 要】

現在、介護現場においては、少子高齢化の進展などに伴う介護職員の不足、過酷な労働環境などによる高い離職率といった深刻な課題を抱えている。

そこで、本市では、国家戦略特区を活用してロボット技術等を導入することにより、単に効率を図るだけでなく、介護の質の維持・向上と安全性を満たしつつ、介護職員の心身の負担軽減や介護職員の生産性の向上、さらには介護職員の専門性や働きがいを高める「先進的介護」の実現を目指していくこととしている。

あわせて、介護現場のニーズと開発側のシーズをマッチングさせることで介護ロボット等の開発・改良につなげていく。

平成28年度の取り組みは以下のとおり。

## 1 実証施設

法人名	施設名	所在地
社会福祉法人 孝徳会 【理事長：渡邊 正孝 様】	【広域型特別養護老人ホーム】 サポートセンター門司	門司区松原一丁目
社会福祉法人 春秋会 【理事長：渡辺 群司 様】	【地域密着型特別養護老人ホーム】 好日苑 大里の郷	門司区大里戸ノ上四丁目

## 2 事業内容

### (1) 介護現場での作業分析 (7～9月)

実際の現場で行われている介護作業の状況を把握し、介護職員の心身の負担の把握や介護ロボット等の導入の可能性を探る。

- ・介護職員や入居者等との意見交換の実施
- ・目視による介護作業の全体の流れの把握
- ・センサー等を活用した作業時間や身体的負担の計測
- ・介護職員が行うべき作業、介護ロボット等が補助できる作業の分類 など

### (2) 共同生活室での介護ロボット等の導入【国家戦略特区事業】 (10～11月)

ユニット型特別養護老人ホームの共同生活室については、介護職員や入居者などの意見を聞きながら、介護ロボット等を導入し、その効果を検証する。

### (3) 分析・評価 (12～3月)

- ①作業分析を通じて得られたデータ等を参考に、介護現場に導入可能な介護ロボット等を検討する。
- ②共同生活室での実証結果や介護職員等の意見を開発側に提案し、今後の介護ロボット等の開発・改良につなげる。
- ③介護ロボット等を活用した介護現場の新しい働き方を検討する。
- ④介護作業における「ノーリフト」(人力のみで入居者を持ち上げることを避ける)の検討。

### 3 介護ロボット特区ワーキンググループ

#### (1) 趣旨

介護ロボット等の実証を的確に進めるために、医療や福祉、人間工学、ロボットなどの専門家から構成されるワーキンググループを設置し、構成員のそれぞれの視点から意見をいただく。

#### (2) ワーキンググループ構成

(五十音順・敬称略)

氏名	所属・役職	専門分野
泉 博之	産業医科大学 産業生態科学研究所 准教授	人間工学
伊藤 直子	西南女学院大学 保健福祉学部 教授	看護
岩井 茂	(一社)日本福祉用具供給協会 福岡県ブロック長	福祉用具
柴田 智広	九州工業大学 大学院生命体工学研究科 教授	ロボット研究
曾我 満美	(公社)北九州高齢者福祉事業協会 副会長	高齢者福祉施設
田代 久美枝	認知症・草の根ネットワーク 理事	利用者団体
橋元 隆	九州栄養福祉大学 小倉南キャンパス副学長	リハビリ
蜂須賀 研二	九州労災病院 門司メディカルセンター 院長	リハビリ
福島 万里子	(公社)福岡県介護福祉士会 理事	介護
山本 憲昭	北九州市立介護実習・普及センター 所長	福祉用具

#### (3) 第一回ワーキンググループの開催

- ① 日時 平成28年7月20日(水) 13:30~15:00
- ② 場所 総合保健福祉センター(アシスト21) 6階 視聴覚室
- ③ 議題
  - ・ワーキンググループにお願いしたいこと
  - ・平成28年度の取り組みとスケジュールについて
  - ・作業分析の計画について

#### ④ 主な意見

##### 【作業分析】

○作業分析で、高負担だと判断された作業でも、訓練するとあまり高負担でなくなる作業もあると思うので注意が必要。

○介護職員の熟練度によって、取得したデータの内容が異なる。

○介護職員は、入居者に対して「声かけ」「タッチング」「表情の観察」などの行為を介護作業のいろいろな場面で行っている。これらの行為も作業分析において観察する必要がある。

○介護作業をしっかりと分析した研究や報告は例が少ない。今回の実証の成果に期待している。

##### 【ロボットの導入・活用】

○介護ロボット導入では、負担軽減の数値化や標準化も大切だが、介護職員にとって、介護ロボットが役に立ったというような主観的な評価も必要。

○介護ロボットの導入時には、使用中のリスクに関するデータも集めておくことが大切。

○介護ロボットの場合、使い方が大切なので、研修の仕組みが必要。

○入居者が、自分でできることを自分でやっている場合は、自立支援の観点から、介護ロボット導入の対象から外した方がよい。

○入居者は、自分でできることは自分で行い、必要な動作のみロボットが補助してくれることにより満足度は高くなる。そういう配慮と取組みが実際の現場だと重要になってくる。

○介護ロボットを介護の流れのなかでどう使うか、どう活用するかというのが重要。人の流れや時間帯などを検討しないと、介護ロボットを単純に入れただけでは、介護ロボットの有効活用は難しい。

○介護ロボットがどれだけ優れているかというより、介護職員がどのように活用するか、どのように介護に組み入れていくかが大切。

##### 【ロボットの開発・改良】

○入居者にはわずかな補助で効果が大きい場合も多い。その“わずかな”補助方法の可能性は、介護職員に教えてもらうことから始めるとよい。

○介護職員が自分達で仕組みを作ったという意識を持ってもらうことが必要。

最終的に、介護ロボットで何ができるかではなく、何をしたいかを導き出すことが必要。

○企業は、新しい機能を追加し、値段を高くする傾向がある。また、扱い方も難しくなる。そのため、利用者は企業に意見を出していかなければならない。